長崎大学感染症ニュース

感染症とたたかう

第24号
2017年
12月発行

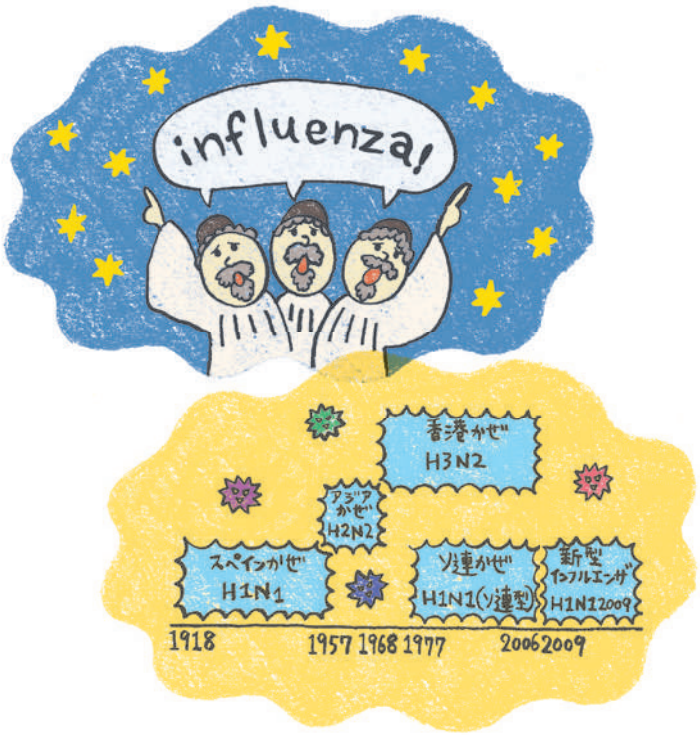
発行：国立大学法人 長崎大学　監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授　泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所　〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4　TEL：095-819-7800（代表）　FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

昔と変わらぬ インフルエンザの猛威 手洗いとうがいによる予防が第一

今シーズンもインフルエンザが全国的に流行しています。自分がかかった、あるいは家族や友人など周囲の方がかかったという人も多いかと思います。今でこそ、インフルエンザはウイルスによる感染症であること、その予防には感染経路を断つための手洗いやうがいが有効であること、子どもや高齢者など抵抗力が弱い人はワクチン接種が有用であることなど、感染や発症を抑えるための対応が広く知られるようになっています。

しかし、インフルエンザと人類との闘いは数千年に及び、20世紀だけでも数千万人が命を落としています。インフルエンザの歴史を紹介します。



語源はイタリア語の「影響」 日本では平安時代に流行の記録

「インフルエンザ」の語源は、イタリア語で「影響」を意味する“influenza”（インフルエンツァ）です。16世紀にイタリアで名付けられました。当時は、細菌やウイルスなどの病原体が発見されておらず、病気が流行するのは汚れた空気によるものと考えられていました。インフルエンザが冬になると流行し、春になると治まることから、占星家たちは天体の運行や寒気などの「影響」によって発生するものと考えたのです。日本語では「インフルエンザ」と呼びますが、これは“influenza”の英語読みです。

インフルエンザの一番古い記録は、紀元前412年にヒポクラテスとリヴィが記録したものとされています。11世紀には明らかにインフルエンザの流行を推測させる記録が残っています。

わが国では平安時代に、近畿地方でインフルエ

ンザと思われる病気が流行したという記録が残っています。江戸時代には、何度か「はやり風邪」として全国的に流行し、「お七風」「お駒風」「琉球風」など、さまざまな名前が付けられました。幕末にはインフルエンザという名前を蘭学者が紹介し、「流行性感冒（流感）」と訳されました。

主なウイルスは３種類、特にＡ型に注意 20世紀には４回の世界的大流行

20世紀には、インフルエンザの世界的大流行（パンデミック）が４回ありました。1918年のスペインかぜ、1957年のアジアかぜ、1968年の香港かぜ、そして1977年のソ連かぜです。いずれもＡ型インフルエンザウイルスによる流行でした。

インフルエンザウイルスは、A、B、C型の３種類あり、このうち急激な広がりを見せるのはＡ型とＢ型です。特にＡ型にはいくつかの種類（亜型）があり、少しずつ構造が変わり（連続変異）、数十年に1度の割合で大きな変異（不連続変異）が起き、パンデミックを起こしています。

1918年のスペインかぜは「H1N1」という型のウイルスの出現によって大流行となり、39年間流行が続きました。WHO（世界保健機関）によれば、1918～19年の間に患者数は世界の人口の約25～30％に上り、25％が発症、死者は4000万人に上ると推計されています。その後、1957年には「H2N2」ウイルスによるアジアかぜが発生し、11年間流行が続きました。1968年には「H3N2」ウイルスで香港型かぜが大流行し、1977年からはソ連型「H1N1」によるソ連かぜが重なりました。

2009年には新型インフルエンザ（H1N1）が世界に広がりました。当初、「豚インフルエンザ」と呼ばれましたが、WHOが「パンデミック（H1N1）2009ウイルス」と命名しました。わが国でも最初の感染者の発生後１年余で約2000万人が罹患したと推計され、過去20年間で最大の流行となりました。現在は、Ａ型の「H3N2」と「H1N1」、Ｂ型の３種のインフルエンザウイルスが世界中で流行しています。

ウイルスに接触しない、させない 子どもや高齢者はワクチン接種を

インフルエンザウイルスの主な感染経路は、空気中に浮遊するくしゃみや咳の飛沫に含まれるウイルスを吸い込む飛沫感染です。したがって、予防の基本は、①インフルエンザの流行期にはなるべく人込みを避ける、②マスクを着用する、③外出後には手洗いとうがいをきちんとすることです。栄養と休養を十分に取って体力を落とさないようにすることも大切です。

ワクチンは感染予防に有効で、特に体力のない子どもや高齢者には積極的な接種が勧められます。接種してから効果を発揮するまで２週間ほどかかるため、なるべく早い時期に接種することが重要です。インフルエンザを発症したら、周囲にうつさないよう、外出を控え、安静にし、水分を十分に補給して、回復を待ちましょう。

次号（2018年1月号）では
「海外からやって来る感染症」を取り上げます。